

## 建武五年鏡について

小 山 満

### I 研究の経過

かつて富岡謙蔵氏が所蔵され、現在和泉市久保惣記念美術館に収められている建武五年鏡（画文帯同向式神獸鏡）について（図1）、主な研究経過を検討してみよう。



図1 建武五年鏡 径24.2 cm

この鏡を最初に紹介したのは高橋健自氏で、大正3（1914）年自ら主宰する『考古学雑誌』（5-2）においてであった<sup>1</sup>。この鏡の年号の建武5年は、後漢光武帝29年、後趙339年、そして南斉明帝498年

<sup>1</sup> 高橋健自「在銘最古日本鏡」『考古学雑誌』5-2, 1914, p.102-118. うちp.110-111 図4

があり、後漢では誰も当てはまるとは言わないとして退け、斉の場合はほとんど 6 世紀に近いことでこれを外し、わが国の古墳（肥後・遠江・下野）からも似た鏡が出土し様式的に穏当な後趙の 339 年に位置づけて、その後も変えることはなかった<sup>2</sup>。

大村西崖氏はこれをうけて『支那美術史彫塑篇』（1915）で『晋書』載記の石季龍に関わる記事を中心に拾い、彼が鄴都に建てた太武殿の絢爛豪華な有様は、この鏡が連動した当時の工人の優れた技量を示すものであると述べて<sup>3</sup>、後趙の 339 年を支持している。

山田孝雄氏は年号を記す 18 面の鏡を表にして掲げて二人の労を謝し、この鑑の豪華さは乳の凹みに珠玉を嵌入したものかと言ひ<sup>4</sup>、この後趙建武 5（339）年を支持している。

二年後、大正 6 年（1917）富岡謙蔵氏は、後趙は僻遠で文明が開けていず、このような技能がある土地とは考えられないとして、南斉建武 5 年の 498 年とした<sup>5</sup>。その理由としてこの鏡が現存の紀年銘鏡中最大であること、この神獸鏡の形式が精緻さを加えて永く後世に行われ隋唐に至ると考えたこと、その傍証に正始元年三角縁神獸鏡を魏の 240 年でなく宋の 465 年と見ていたことによる（図 2）。



図 2 正始元年三角縁神獸鏡 径 22.7 cm



図 3 半円方形帯神獸鏡 西晋 273 年径 17.6 cm

後藤守一氏は高橋健自、富岡謙蔵両氏の説を紹介し、確実な資料が乏しくいずれも定説とはできないが、仮に（一時的に）富岡説に従うと記している<sup>6</sup>。

京都大学で富岡氏の後継者となった梅原末治氏は『漢三国六朝紀年鏡図説』（1943）で、外区に画文帯をもつ半円方形帯神獸鏡は西晋初期の鏡式に似ているが（図 3）、類例のないこの鏡の巧緻さから見てその時代でないとし、銘文にある宋国を次の南朝宋国のことと解して南斉建武 5（498）年を支持した<sup>7</sup>。

<sup>2</sup> 同「六朝以前紀年鏡資料の増加」『考古学雑誌』18-6, 1928, p. 338-342. の 342

<sup>3</sup> 大村西崖『支那美術史彫塑篇』1915, 1972 復刻, 国書刊行会, p. 138, 図 412

<sup>4</sup> 山田孝雄「古鏡の銘について（一、二）」『人類学雑誌』30-11, 12, 1915, p. 407-408, 455-456

<sup>5</sup> 富岡謙蔵『古鏡の研究』1920, 1974 復刻, 臨川書店, p. 93-94, 132-133, 142-145

<sup>6</sup> 後藤守一『漢式鏡』1926, 1973 復刻, 雄山閣, p. 806

<sup>7</sup> 梅原末治『漢三国六朝紀年鏡図説』1943 桑名文星堂, p. 119-120 図版 67

以後この説が定説となり長く継承されていく。五島美術館の展覧会図録<sup>8</sup>や、大阪市立美術館<sup>9</sup>、毎日新聞社<sup>10</sup>和泉市久保惣記念美術館の出版書<sup>11</sup>など。

しかし大阪市美術館の『六朝の美術』（1976年）で樋口隆康氏は、重要文化財として指定されたこの鏡を一応南斉時代498年としているが、当時は経済的に切迫し貨幣も悪質で到底このような良質の銅鏡は作られ得ないとして、後趙339年でよいのではないかと記している<sup>12</sup>。

## II 銘文

この鏡の銘文で読み取れる部分は以下の通りであるが、問題を考えてみよう。

吾作明鏡 王吉□□ 亘□昌万 □周家東（5枚不明）太□宋国 五年建武 冊命晋侯（1枚不明）其師命長（図4）



図4 建武五年鏡（拡大図）

### 1) 建武五年

文の始まりの吾作明鏡は偏と旁が正しく表われるように左右を考えて意識して書き入れてある。この吾作明鏡を起点としてみると、表面を左巡りに回している。しかし建武五年（図4中央）は雌型の四字格に全く正字で書き入れたことにより左右の行まで入れ違っている。一般に左字として現れるのは正字で書き入れた文字が反転して出来上がるためで多く見かけるが、この左右の入れ違いでさらに疑いをかけることは行き過ぎであろう。

史上建武年号は、後漢光武帝、西晋惠帝、東晋元帝、後趙石虎、西燕慕容忠、南斉明帝、北魏北海王の7つあるが、4つは1年以内で5年まで続くのは後漢（29）、後趙（339）、南斉（498）の3つである<sup>13</sup>。後漢の建武5年（29）はすでに指摘されていた通り、様式上難しく、南斉の建武5年は4月に永泰に改元されているので、この年の3ヶ月余の短期間で権威の象徴としての豪華な鏡の製造を想定することは、凋落する史的背景からみても難しい。また、『南斉書』は、この年を建武5年とせず、「永泰元年春正月

<sup>8</sup> 五島美術館『前漢から元時代の紀年鏡』1992, p. 77, 図23

<sup>9</sup> 大阪市立美術館『六朝の美術』1976, 平凡社, p. 193-205 うち193-4

<sup>10</sup> 毎日新聞社『新指定重要文化財10 考古資料』1981, p. 306-7

<sup>11</sup> 『和泉市久保惣記念美術館蔵品選集』1990p. 84-85

<sup>12</sup> 上掲注9, p. 193-194

<sup>13</sup> 『歴代年号考』李崇智編著 中華書局1981p. 10. 21. 22. 34. 44. 61. 79

癸未朔大赦」と書き始めているので、この年に対する重みはすでない<sup>14</sup>。後趙の339年については後段で検討する。

## 2) 宋国

『晋書』14 地理志上に西晋武帝司馬炎が泰始元（265）年に「諸王を封ずるにあたり郡を国となす」との記述がある<sup>15</sup>。郡を国の名称に改めたという。「宋国」は旧宋郡であったということであるから必ずしも国家としての宋と解する必要はない。そして『春秋経』に伝える170国のうち、139は居所を知るとあり、魯・宋・晋などその名が出ている<sup>16</sup>。地名としての宋を調べると、河南省高邱県西南三里の故商邱の名称として見出すことができる<sup>17</sup>。

## 3) 晋侯

晋侯については『晋書』106 載記6 後趙石虎の咸康3（337）年の条に、石虎が大趙天王を僭称し、諸藩の王を県侯に任命したとある<sup>18</sup>。晋侯もその一つとすれば、晋については山西省太原県に4世紀初めにその名が存在している<sup>19</sup>。

以上から、宋国は旧宋郡を改めて名づけられた名称であり、晋侯は晋県の侯として用いられた呼称と理解されるので、後趙の建武5（339）年説を外す必要はないということがわかる。

# III 画像と文様

画像と文様について説明してみよう<sup>20</sup>。

## 1) 内区

鈕とその周囲に流珠と思われる有節重弧文があり、画像は三段に分かれている。

上段中央に弾琴の伯牙、左に鍾子期（あるいは赤松子）、右に成運（あるいは王子喬）による鈞天の楽の場面がある（図5）。伯牙は啄ばみ（左）羽ばたく（右）二羽の鳳凰に囲まれている。

上段下方左右には巨を銜え（左）口を開けた巨大な龍（右）がいる。左の龍の銜えた巨は伯牙の座卓を支え、別の龍がその端を銜えている。右の巨龍にはひげがみえている。

中段鈕をはさみ通天冠（三山冠）の東王父と勝を頂く西王母が対称的に坐している。東王父の左右に脇士の龍（左）と虎（右）がいて、左上に龍、右に虎の顔がみえ、西王母の左右には鳳凰（左）と兔（右）がいて、兔の上に小獣がいる。

下段の左の巨大な虎は東王父の座卓を支え、右の龍は西王母の座卓を支えている。巨大な龍虎は上段

<sup>14</sup> 『南齊書』中華書局1972. p. 90-91

<sup>15</sup> 『晋書』14, 地理志上, 中華書局1974, p. 414

<sup>16</sup> 同上p. 411-412

<sup>17</sup> 青山定雄『中国歴代地名要覧』1933, p. 382

<sup>18</sup> 『晋書』106, 載記6, 石虎, 咸康3年条, p. 2765

<sup>19</sup> 上掲注17, p. 304

<sup>20</sup> 中野三郎『古代鏡文化の研究』1 雄山閣出版1966 図219-222p. 85-87. 中野徹『久保物記念美術館蔵鏡目録』1985, p. 78-79. および『東方学報』86, 2011 等を参照した。





図5 建武五年鏡（内区画像）

と合わせると龍3虎1の組み合わせである。

中央大亀（鼈）の座上に冕冠（通天冠）をつけた黄帝と道教の聖者とされる老君（老子）が坐している。

画像の外側に鋸歯文をはさみ獣（獅子）面を浮彫した14の半円と芝草文様座上に同じく14ケの四字ずつ入った方形があり、文字は上記でみた通りである。半円方形帯の地面は敷き詰めた粒点と2ケずつの小円があり一つの特徴として考えられる。

## 2) 外区

半円方形帯の外側にV字状の帯があり、つぎに鋸歯文と凸線とをはさんで蹠に乗り上空に上がる神仙の騎獣群像がある。

鏡面を左回りに一周するこの図像は、日を捧持する1仙（羲和）に始まり、それを追って虎に乗る1仙、そして雲上長頸の6龍と5蛇が雲車の蹠（そり）を引く。蹠には3仙が乗り、1仙が押している。その後ろに亀に乗る2仙がいる（図6）。そして月を捧持する1仙（望舒）、禪姿獸面の力士（甲卒）が続く、天禄に騎乗する2仙と虎に乗る2仙、従者の2仙と鳳凰に騎乗する2仙が続く、最後が2つめの禪姿獸面の力士となる（図7）。



図6 建武五年鏡 画文帯1



図7 建武五年鏡 画文帯2

外縁の文様は輪つなぎ文で、内側を唐草状に展開し上下に交錯する流雲文が巡り華やかな雰囲気を出している。その外に凸線が巡り無文の縁で終わっている。

#### IV 『抱朴子』の記述

##### 1) 雲車の蹕

本鏡の外縁、雲車の躡を引く六龍や騎虎仙について『抱朴子』雑記 15 ではつぎのように記している<sup>21</sup>。

「よく躡に乗る者はもって天下を周流して山河に拘らざるべし。およそ躡に乗る道に三法あり。一を龍躡、二を虎躡、三を鹿盧躡という。あるいは橐心木を用いて飛車を作り、牛革をもって環釧に結び、もってその機を引き、あるいは五蛇六龍三牛を作り、交も剛くしてこれに乗り、上昇すること四十里なれば、名づけて太清となす。太清の中、その気甚だ剛くしてよく人に勝（かな）う。

本鏡の鏡背外区はこれを示す一例と言っているし、日を捧持する羲和や月を捧持する望舒の名もみえる<sup>22</sup>。

## 2) 径九寸已上

『抱朴子』は道教の修行に鏡の径九寸以上を用いることを述べている。

雑記 15 に、「或いは明鏡九寸以上を用いて自ら照らし思存する所あること七日七夕なれば即ち神仙を見るべし」 登涉 17 に、「古の入山の道士、皆明鏡径九寸以上をもって背後に懸く。老魅も敢えて近づかざるなり」

とある<sup>23</sup>。

鏡径九寸以上は晋代 1 寸 2.40 cm とすると、21.6 cm 以上ということであり、本鏡の 24.2 cm は十寸と考えられるので、十分適合する。

## 3) 上士・中士・下士

本鏡内区の図像を三段に分けている点では『抱朴子』に上士・中士・下士の記述があり、これに関係する。

金丹 4 に、「其経（『太清観天経』）に曰く、上士道を得れば天官となり、中士道を得れば崑崙に棲集し、下士道を得れば世間に長生すという」

明本 10 に、「或いは云う、上士は道を三軍に得、中士は道を都市に得、下士は道を山林に得」とある<sup>24</sup>。

最高の人間は天に昇り天神となり、中流の人間は崑崙山に住んで人神となり、最下のものは世の中にいて長寿を保ち、それぞれ道を戦陣の中、都市、山林で得るといふ。

崑崙山は玉の産地で西王母が住み神仙がいて人間の憧憬の地とされていた。

本鏡上段に「明本 10」にいう太清で鈎天の楽を聴く天神の世界が示されている<sup>25</sup>。中段左右に東王父西王母が坐しているのは中士の往く崑崙山の地<sup>26</sup>。下段大亀に乗る黄帝と老子はこの世を統治する皇帝と聖者である。

東王父、西王母については、西王母杖の荀杞、戦に臨む時に持つ西王母の兵信の符、卯の日山中に出る大鹿と鹿を東王父、西王母と言っている<sup>27</sup>。

<sup>21</sup> 葛洪『抱朴子』雑記 15、王明『抱朴子内篇校釈』中華書局 1985, p. 275 (269-270) および石島快隆『抱朴子』岩波書店 1942, 1987 再販、こちらの p. を( ) に入れた。

<sup>22</sup> 同上 p. 154 (147)

<sup>23</sup> 同上 p. 273 (266-267) 300 (292-293)

<sup>24</sup> 同上 p. 20 (44) 76 (77) 187 (172) 287 (280)

<sup>25</sup> 同上 p. 189 (175)

<sup>26</sup> 村上嘉実『抱朴子』1967 明徳出版社, p. 57. および駒井和愛『中国古鏡の研究』p. 64, 125-7 を参照した。

<sup>27</sup> 上掲注 21 葛洪『抱朴子』p. 196 (178) 270 (260) 304 (301)

下段については「明本 10」に、「それ道を体しもって物を匠（つく）り、徳を宝として、もって生を長くする者は、黄老これなり」等とあり黄老についての記述は多い<sup>28</sup>。

#### 4) 大亀

下土の下にうずくまる獣は「雑志 15」にいう、神亀（仙薬 11 では千歳の霊亀）で、これを老子が牀としていたとある<sup>29</sup>。また「対俗 3」に記す大亀・鼈（不死の法を有す）では、その下に蠣（ほら貝）がいる、あるいは千歳の亀は蓮華の上に浮かぶとあり、これらを描いているともいえる<sup>30</sup>。

#### 5) 半円の獣面

半円方形帯の半円に浮彫される獣面は、「祛惑」にいう、崑崙山の楼下にうごめく青龍、白虎ほか、神獣の獅子、辟邪、天録、焦羊等 36 種がいて、それぞれの名前を知っていれば悪鬼、悪獣から免れるという<sup>31</sup>。この神獣、獅子・辟邪…の類であろう。

以上、鏡面の図像を逐一『抱朴子』の記述に合わせることができるので、この鏡が『抱朴子』の成立した西晋建武元年（317）前後に位置づけられるとみてよく<sup>32</sup>、銘文の建武五年は後趙建武 5 年（339）としてみても矛盾は生じない。

## V 結び

本鏡はこれまで南斉の建武 5（498）年として定説扱いにされてきたが、その裏付けは確定的なものではなかった。では後趙の建武 5（339）年とした見解とのどこに問題があったのか。

その一つは晋侯、宋国と記す銘文で、ここに南朝の国々の西晋と宋をあてはめたことにある。これについては上述した<sup>33</sup>。もう一つは、五胡の建てた国々は正統でないともみる、いわば偏った見方によるものであったと思う。五胡の諸国が建国にあたり改元し皇帝を名乗るのは、漢風化を志向する彼らの文化摂取の姿でもあったから、彼らが漢族国家と同じく鏡を製作し国家のシンボルとしてこれを用いたことを見逃すべきではない。大村西崖氏が史書を通してこの点を正視していた点は評価されるべきである<sup>34</sup>。

そして樋口隆康氏が、南斉代では年号ある大きな鏡はほとんど発見されず、当時の経済活動では銅銭が貧弱で到底本鏡のような豪華な鏡を生産する土壤にないとの指摘は正鵠を射ていると思う。南斉遺跡からの出土鏡は、年号鏡は今日でも発見されず、やはり小さな鏡であった<sup>35</sup>（図 8）。

<sup>28</sup> 同上 p. 188 (174) 122 (109) 149 (138) 241 (223)

<sup>29</sup> 同上 p. 273 (267)

<sup>30</sup> 同上 p. 49 (55) 47 (52)

<sup>31</sup> 同上 p. 349 (354)

<sup>32</sup> 同上 p. 377 (354)

<sup>33</sup> 上記本文Ⅱ銘文 2) および 3)

<sup>34</sup> 上掲注 3, 大村著 p. 121, 133, 135, 138, 139

<sup>35</sup> 江西贛県南斉墓『考古』1984-4, p. 348



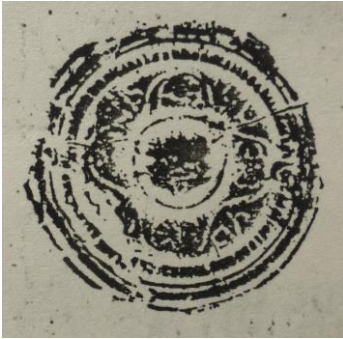


図8 江西贛県南齊墓出土鏡 径3.2 cm



図9 五格五獣文鏡 隋-唐 径19.2 cm

一方、富岡謙蔵氏は、半円方形帯の獣面が隋代の鏡面に見えることから本鏡もその年代近くまで下げてよいとしたが<sup>36</sup>、半円に見える獣面の類似性は明らかでなく、隋の鏡の様式も本鏡と大きく異なるので、これを受け入れることはできない（図9）。すべてが獣面ではないが、白鶴美術館所蔵の六朝とする鏡、画文帯四神四獣鏡（径14.2 cm）には諸動物とともに獅子の獣面が3つ東王父の下半円に浮彫されている（図10）。これは複数の獣面をもつ同類の鏡として裏付けられるであろう。



図10 画文帯四神四獣鏡 径14.2 cm



図11 羽人形金具 7.9 cm

本鏡を所蔵する久保惣記念美術館の『蔵鏡図録』では、富岡説をうけて描かれた図像の多く、例えば狻猊（獅子）や諸神が隋代まで受け継がれるとして時代を下げている<sup>37</sup>。しかし、むしろ晋代前後にその指摘のほとんどを見出すことの方が肝要である。例えば揮姿の力士については、羽人形金具として三国時代とする揮姿の怪神の浮彫があり（図11）<sup>38</sup>、また外縁の輪つなぎ文の鏡（唐草流雲文鏡）は、三国から六朝時代とするなど（図12）<sup>39</sup>、いずれも時代を遡上させている。

<sup>36</sup> 上掲注5、『古鏡の研究』p. 133, 143

<sup>37</sup> 上掲注20『久保惣紀年美術館蔵鏡目録』1985, p. 78-79

<sup>38</sup> 上掲注9、『六朝の美術』図162

<sup>39</sup> 梁上椿（田中琢・岡村秀典訳）『岩窟蔵鏡』同朋社出版1989, p. 116, No.360

したがって、本鏡は南斉明帝建武 5 年（498）でなく、後趙石虎建武 5（339）年を妥当な年代とすべきである。



図 12 唐草流雲繫文鏡 径 13.1 cm

#### 図版

- 図 1 建武五年鏡 『和泉市久保惣記念美術館蔵品選集』 1990 図 85
- 図 2 正始元年三角縁神獸鏡 樋口隆康『古鏡』 1979, 新潮社 図 2
- 図 3 半円方形帯神獸鏡 西晋 273 年梅原末治『漢三国六朝紀年鏡図説』 1943 桑名文星堂, 図版 58
- 図 4 建武五年鏡（拡大）『前漢から元時代の紀年鏡』 1992, 図 23
- 図 5 建武五年鏡（内区画像）樋口隆康『古鏡』 1979, 新潮社, 図版 106
- 図 6 建武五年鏡（下部）同上図 4
- 図 7 建武五年鏡 画文帯 1 同上図 4
- 図 8 江西贛県南齊墓出土鏡 『考古』 1984-4, p. 348
- 図 9 五格五獸文鏡 和泉市久保惣美術館 『蔵品選集』 図 87
- 図 10 画文帯四神四獸鏡 白鶴美術館 『六朝の美術』 図 36
- 図 11 羽人形金具 禪姿の力士 『六朝の美術』 図 162
- 図 12 唐草流雲繫文鏡 梁上椿 『岩窟蔵鏡』 No.360

## Summary

### On the bronze mirror dated the fifth year of Jian-wu

Mitsuru Koyama

There are two current theories of the study for the bronze mirror dated the fifth year of Jian-wu. The one is the year 339 of Hou-zhao, the other is the year 498 of Nan-qi. The latter theory was convinced.

The reason was pointed out about the letters Song-guo and Jin-hou described on the mirror. They were understood as the name of nations of China.

However, Song-guo means the old Song county and Jin-hou shows a prefectural government in the history book "Jin-shu". Therefore, I understand that they do not become the grounds that show the year 498 of Nan-qi.

As for the image of the mirror back, an inner ward is divided into three steps. The upper section is the scene of heavenly music. The middle section is the immortals of China. The right side is Xi-wang-mu and the left side is Dong-wang-fu. The lower section is described the King Huang-di and Lao-zi. The outside of the mirror is a scene of ascension.

The image of the mirror both sides are related with the book "Bao-pu-zi" written by Ge-hong. The book was written 317 A.D. So we know the mirror should be produced in the near time.

On the styles, there are already the same patterns from the Age of 3rd century, so I assume this mirror should not be the year 498 but should be the year 339 A.D.